キャリア・カウンセリングにおける教員の役割と課題

Roles and challenges of teachers in career counseling

環境教育学科　二川 正浩

1．問題の所在と研究の目的

文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(平成16年1月)では、キャリア・カウンセリングを「子ども達一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供しながら、子ども達が自らの意思と責任で進路を選択できるようにするための個別またはグループ別に行う指導援助」[1)]と位置づけ、基本的なキャリア・カウンセリングについてはすべての教員が行うことができるようになることが望まれること、そして教員養成段階におけるキャリア教育及びキャリア・カウンセリングにかかわる基礎的・基本的な知識や理解が得られるようにすることを求めた。

そのうち、前者については「キャリア・カウンセリング研修（基礎)」と「キャリア・カウンセリング研修（専門)」の二つの研修プログラムを例示し、各学校のすべての教員が基本的なキャリア・カウンセリングを行うことができるようにするための研修の充実を求めているが、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」(平成25年３月)(以下、第一次報告書と称する）の調査結果によると、平成20年度から24年度間の５年間に高等学校の教員が参加した学校外におけるキャリア教育に関する研修のなかで、キャリア・カウンセリングは26.1％で第１位となっている。[2)] また、後者については教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会「教職課程コアカリキュラム」(平成29年11月17日）の「進路指導及びキャリア教育の理論及び方法」の到達目標に、「キャリア・カウンセリングの基礎的な考え方と実践方法を説明することができる」ことが示された。

その上で、平成29年告示中学校学習指導要領の第１章総則の第４節「生徒の発達の支援」には、生徒の発達を支える指導の充実のための配慮として「主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により、生徒の発達を支援すること」、そして「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」[3)] が示され、キャリア教育におけるガイダンスとカウンセリングの充実が学校と教員に求められこととなった。

このように、キャリア教育におけるキャリア・カウンセリングが重要性を増す一方で、中学校や高等学校におけるキャリア・カウンセリングが「卒業直後の進路決定のための相談（面談）と限定的に受け止められ、その大切さが十分に認識されていない」[4)] ことや、キャリア・カウンセリングを重視している学校が半数にのぼるものの、キャリア・カウンセリングを年間指導計画に位置づけている学校が中学校では55.9％、高等学校では61.6％にすぎないという実態[5)] などの課題も抱えている。

それらの現状をふまえて、本稿では現実的な進路の選択決定が迫られる高等学校におけるキャリア・カウンセリングの実態についての調査を行い、まず以下の点について明らかにしていきたいと考える。

・キャリア・カウンセリングの実施状況と相談内容を調査し、高等学校におけるキャリア・カウンセリングの現状と課題を明らかにする。
・キャリア・カウンセリングを担当した教員の姿勢を調査し、高等学校におけるキャリア・カウンセリングを担当する教員の姿勢と課題を明らかにする。

・キャリアカウンセラーの必要性の有無を調査し、教員によるキャリア・カウンセリングの役割と課題について明らかにする。

そして、それらの調査結果と学生が進路選択にあたってよく相談した相手や将来への展望、そして自己肯定感に関する調査結果をあわせて、学校でのキャリア・カウンセリングにおける教員の役割と課題について考察していきたいと考える。

２．調査の概要

調査は2020年７月に東京都内の女子大学に通う教職課程を履修中の３年生に対して、事前に調査の回答等は成績に反映しないことと個人情報が特定できないように処理を行うことを確認の上で、以下の調査を実施した。なお、有効回答者数は123名で、内訳は中学校及び高等学校の教諭免許取得のために履修中の学生が83名、養護教諭免許取得のために履修中の学生が40名となっている。

１．キャリア・カウンセリングの実施状況と相談内容について

あなたが高校入学から卒業までに行ったキャリア・カウンセリング（進路相談）を思い出して、該当するものを赤字にしてください。（実施方法と教員は複数回答可）

実施方法	教員	相談内容（①狭義の進路選択　②広義の進路選択）
□定期相談	□担任 □進路担当 □その他	□①が中心　□①と②の両方　□②が中心
□呼出し相談	□担任 □進路担当 □その他	□①が中心　□①と②の両方　□②が中心
□チャンス相談	□担任 □進路担当 □その他	□①が中心　□①と②の両方　□②が中心
□定期相談を含めて、進路選択に関する相談の機会や場はなかった。		
□自発相談	□担任 □進路担当 □その他（　　）	□①が中心　□①と②の両方　□②が中心

２．キャリア・カウンセリングを担当した教員の姿勢について

あなたが高校生の時に進路選択について相談した３年次の担任の先生、進路担当の先生、その他の先生の姿勢について、それぞれ該当する選択肢を赤字にして下さい。

①生徒のことをよく理解していた　・・・（　とても　まあ　あまり　まったく　）

②生徒の意思を尊重していた　・・・（　とても　まあ　あまり　まったく　）

③親身になって相談にのってくれた　・・・（　とても　まあ　あまり　まったく　）

④傾聴や受容などの態度で相談にのってくれた　・・・（　とても　まあ　あまり　まったく　）

３．キャリアカウンセラーの必要性の有無　・・・　キャリアカウンセラーに相談をしたかったと思いますか。

（　とても思う　少し思う　あまり思わない　まったく思わない　）　※理由については自由記述

４．進路選択にあたって、よく相談した相手は誰ですか。（二つ選択）

□母親　□父親　□兄姉　□祖父・祖母　□親戚　□担任　□進路指導の先生　□担任・進路指導以外の先生

□小・中学校時代の先生　□塾・予備校の先生　□その他の大人　□友人　□先輩　□その他　□相談相手はいない

５．以下について、あなたはどう思いますか。（文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」平成23年11月 p. 9）

（1）子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている。

（　とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない　）

（2）人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない、といった子どもの増加。

（　とても思う　まあそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない　）

６．これからの未来は「好ましい社会」だと思いますか。

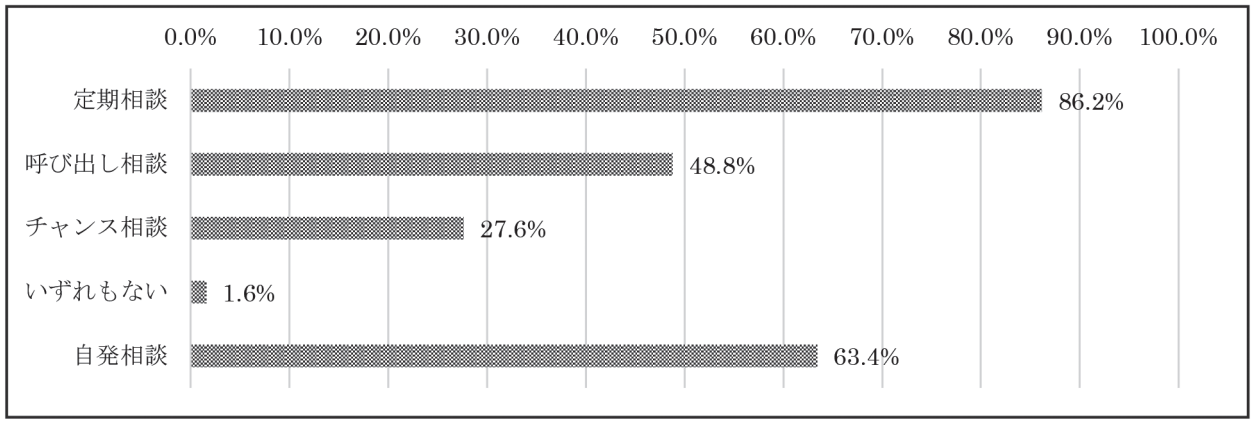
（　とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない　）

なお、設問２、４、６については、一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ「合同調査第9回高校生と保護者の進路に関する意識調査2019年報告書」（2020年2月）（以下、「リクルート意識調査2019」と称する）[6)] を参考にして作成している。

３．調査の結果と考察

（１）キャリア・カウンセリングの実施状況と相談内容

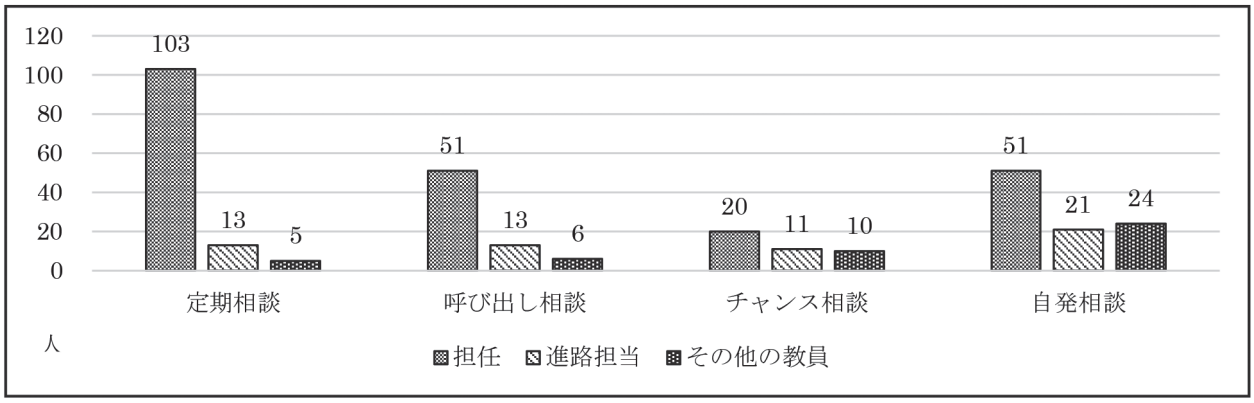
まず、キャリア・カウンセリングの実施形態について、教員を主体として実施する定期相談、呼出し相談、チャンス相談、そして生徒の申し出によって実施する自発相談等の形態毎に、それぞれの実施状況を調査した。その調査結果はグラフ１の通りである。



グラフ１　キャリア・カウンセリングの実施状況

このように、年間指導計画に位置づけられていると想定される定期相談を受けた学生は86.2％で、第一次報告書の61.6％と比較して高い割合となっている。また、いずれもないと回答した学生は1.6％（２名）であるが、そのうち１名は自発相談を行っており、学校においてキャリア・カウンセリングを受けていない学生は１名のみであった。

次にキャリア・カウンセリングの担当者についての調査結果はグラフ２の通りである。

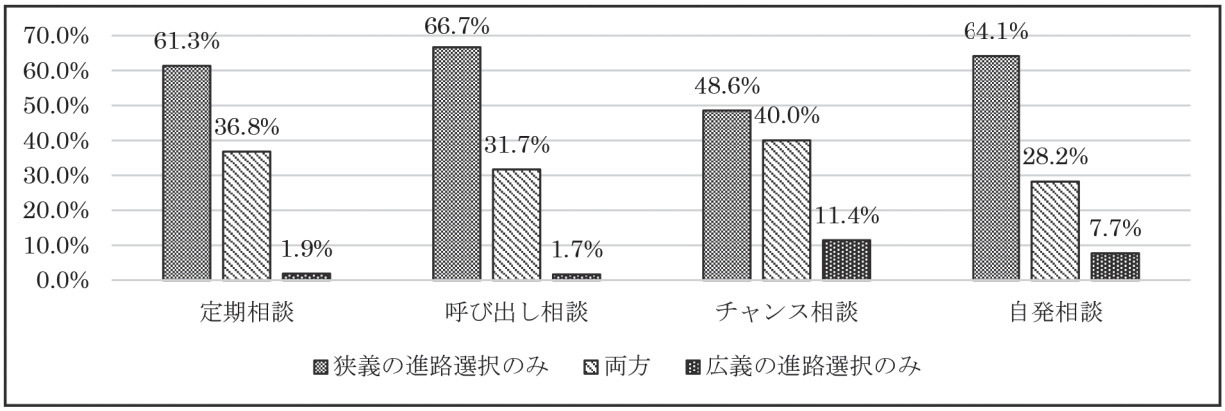


グラフ２　キャリア・カウンセリングの担当者

このように、すべての実施形態においてホームルーム担任が一番多く、キャリア・カウンセリングをホームルーム担任とのみと行ったと回答した学生は61名（49.6％）にのぼった。一方、50.4％の学生は複数の教員とキャリア・カウンセリングを行っているが、特に自発相談では、担任以外の進路担当や顧問、教科担任などの教員が関わった割合が高くなっている。なお、自発相談は生徒が信頼している、または相談しやすい教員に相談しに行くと考えられるが、その他の教員の内訳は部活の顧問が９名、教科担当の教

員が６名、養護教諭が８名となっている。ただし、養護教諭と回答した学生の内訳は養護教諭免許取得のために履修中の学生が６名で、教諭免許取得のために履修中の学生は２名となっている。

その相談内容については卒業直後の進学・就職などの狭義の進路選択に関する相談内容と、自分の適性や将来設計などに関わる広義の進路選択に関する相談内容の二つに分類して調査を行ったが、その調査結果は、狭義の進路選択に関する相談内容のみの学生が54名（43.9%）、両方が66名（53.7%）、広義の進路選択に関する相談内容のみの学生が３名（2.4%）となった。なお、実施形態別による相談内容に内訳についてはグラフ３の通りである。



グラフ３　キャリア・カウンセリングにおける相談内容

このように、すべての実施形態において狭義の進路選択に関する相談のみと回答した割合が高く、呼び出し相談では66.7%にのぼっている。一方、チャンス相談では広義の進路選択に関する相談のみと回答した割合が11.4%と他の実施形態よりも割合が高く、両方を含めると51.4%と過半数を超えている。

その上で、キャリア・カウンセリングの実施状況と相談内容についての調査からは、以下の現状が明らかになった。

・キャリア・カウンセリングが様々な実施形態を組み合わせながら全校でほぼ実施されている。
・キャリア・カウンセリングにおいては、ホームルーム担任が重要な役割を果たしている。
・卒業直後の進学・就職など狭義の進路選択など、いわゆる出口指導的な相談内容の割合が高い。

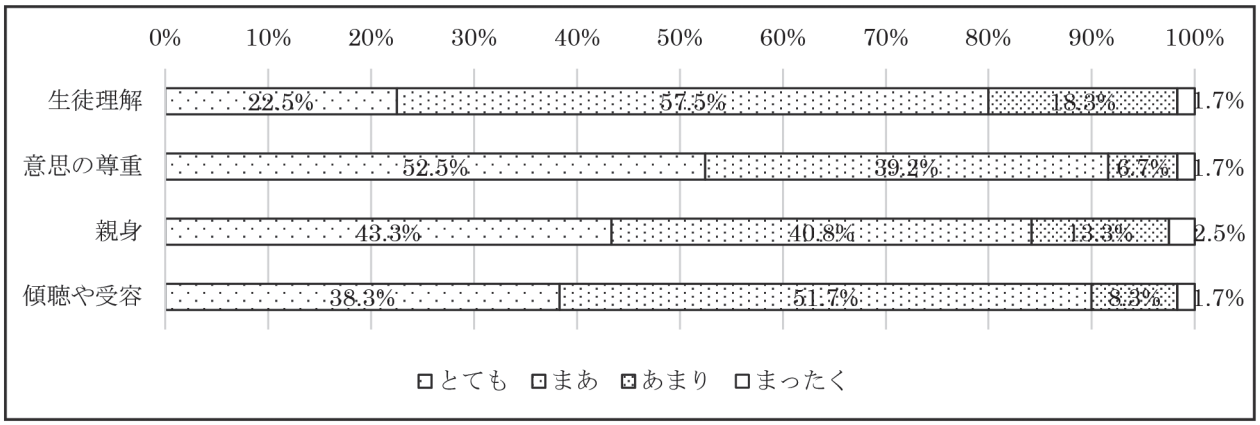
その現状を受けて、課題としては卒業直後の進学・就職などの相談に限らず、自己の可能性や適性などを含めた幅広い進路選択に関する相談（指導や援助）が求められることがあげられる。この点については前述のように「卒業直後の進路決定のための相談（面談）と限定的に受け止められ、その大切さが十分に認識されていない」と指摘されてきた通りであるが、出口指導的な相談内容のみと回答した学生が54名（43.9%）いたことをふまえて改善する必要があると考えられる。

（２）キャリア・カウンセリングを担当した教員の姿勢

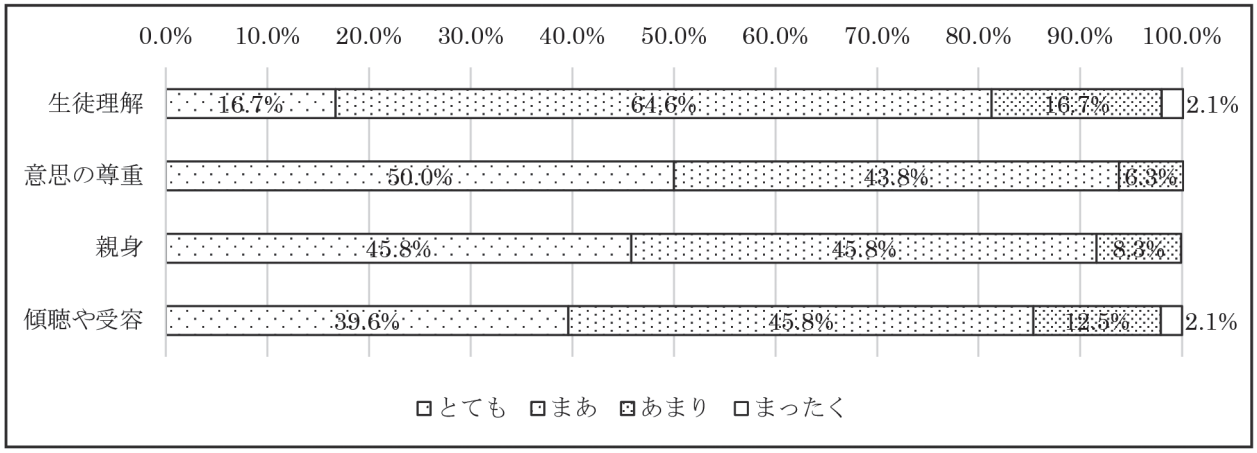
キャリア・カウンセリングを担当した教員の姿勢の調査にあたっては、「リクルート意識調査2019」の40.進路指導への要望（p.69）の中の進路相談に関する質問を参考にしながら[7)]、カウンセリングで求められる傾聴や受容の態度を加えて以下の４つの設問で調査を行った。

・生徒のことをよく理解していた。　・生徒の意思を尊重していた。
・親身になって相談にのってくれた。　・傾聴や受容などの態度で相談にのってくれた。

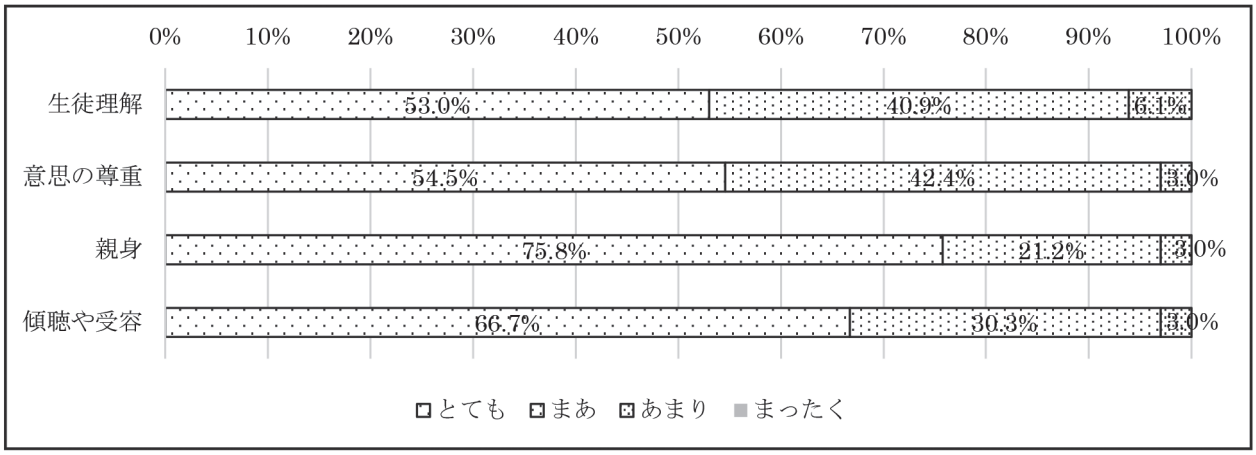
なお、調査は担当した教員別に行ったが、その調査結果はグラフ４～６の通りである。



グラフ４　キャリア・カウンセリングを担当したホームルーム担任の姿勢

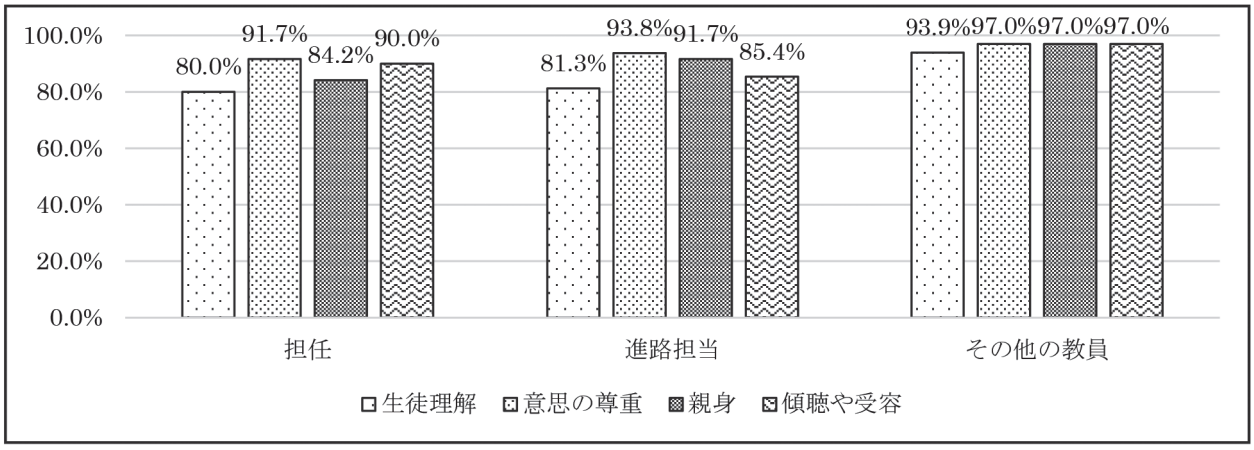


グラフ５　キャリア・カウンセリングを担当した進路担当の教員の姿勢



グラフ６　キャリア・カウンセリングを担当した担任や進路担当以外の教員の姿勢

この調査結果からは、グラフ７で示したようにすべての質問で「とても」「まあ」を合わせた割合が80％を超えており、キャリア・カウンセリングを担当した教員の姿勢は概ね評価されていることが明らかになった。



グラフ７　「とても」と「まあ」の回答を合わせた教員の姿勢への評価

そのなかで、最も高い評価を得ているのはその他の教員で、すべての質問で「とても」を選択した学生が半数を超え、逆に「まったく」を選択した学生は一人もいなかった。一方、ホームルーム担任については、意思の尊重では「とても」を選択した学生が半数を超えたが生徒理解は22.5％に留まり、すべての質問において「まったく」を選択した学生が若干であるが見られた。

それらをふまえて、課題としてはキャリア・カウンセリングを主として担当するホームルーム担任については、生徒のことをよく理解した上で親身になって相談する姿勢をすべての教員が持つ必要性があげられる。ただし、ホームルーム担任は生徒と接する機会が最も多い反面、生徒との相性の問題や担任として行う生徒指導や多忙な校務等を考慮する必要がある。

（３）キャリアカウンセラーの必要性の有無

キャリアカウンセラーの必要性の有無については、学校の教員によるキャリア・カウンセリングの役割と課題を考察するために、高校時代にキャリアカウンセラーがいた場合、相談をしたかったかどうかを問う調査を行った。その調査結果は、「とても思う」が19.5％、「少し思う」が53.7％、「あまり思わない」が22.0％、「全く思わない」が4.9％となった。

そのうち「とても思う」と「少し思う」を合わせると73.2％となるが、その理由は大きく以下の有１～有７に分類される。

有１：相談することによって、もっと広い視野で進路を考えることができたと思うから。（21人）

有２：将来設計や職業選択について、具体的な相談ができる（したい）と思ったから。（15人）

有３：専門的な話を聞けると思ったから。（14人）

有４：教員が信頼できなかった、親身でなかった、十分な時間をとってくれなかったから。（9人）

有５：学校の教員以外の専門家から進路に関する情報を収集したり、相談をしたかったから。（9人）

有６：学校での相談内容が大学への進学に関する内容に限られていたから。（8人）

有７：進学や将来への不安を解消してくれそうだと思ったから。（7人）

一方、「あまり思わない」と「まったく思わない」を合わせると26.9％であるが、その理由は大きく以下の無１～無３に分類される。

無１：信頼できる教員が親身に相談にのってくれたから。（10人）

無２：自分を知っていて信頼できる人と相談したいから。（７人）

無３：自分で進路は決められたから。（７人）

この両者を比較すると、有４と無１はそれぞれ教員の姿勢が理由の背景となっているが、その具体的な記述内容（個人情報保護の観点から一部編集）は以下の通りとなっている。

【有4の教員の姿勢に関する否定的な記述】

・高校が進学校だったため、担任や進路指導の先生は国公立や有名私大を目指す人は熱心に話を聞いていたが、純粋に進路の話をしてくれる人と一度相談に乗ってもらいたかったと思う。
・当時の担任が親身になって進路相談をしてくれなかったため。（担任から一方的に意見を押し付けられるようなことが複数回あったため）
・先生だと気を使って本音が出せないこともあり、本音を吐き出すことができ、傾聴してくれる人がいたら少し気持ちが楽になっていたと思うため。
・相談する機会の多かった担任が話を右から左に聞き流し、生徒の置かれている状況を考えもせず意見の押し付けがあり、相談が行いにくかった。進路担当の先生も忙しく時間が取れなかった。
・担任だった先生は、専門学校に行きたいと思っている生徒の気持ちをあまり考えずに他の大学を薦め続けたり、周りの視線を気にしてなのか親身に相談に乗ってくれているという印象がなかった。
・教科を担当している教師は、他にやらなければいけないことも多く、相談してもこちらにさける時間が少なくなってしまうため、専門家にも相談してみたかった。
・（キャリカウンセラーは）話を聞くという専門的な先生なので、時間を理由に生徒が追い返されることがないと思ったから。
・生徒数が多かったからか進路指導の先生方はひとりひとりに対して丁寧とは言えない助言をくださるだけだったし、担任もやる気がない感じの先生だったので。
・基本的に担任の先生はいつも誰かの予約があって忙しそうで自分のことで相談に乗ってもらうことが申し訳なかったのと、私は受験期によく親と喧嘩してしまったので、自分の受験期のメンタル面の相談に乗ってくれる人が少なくて悲しかったから。

【無1の教員の姿勢に関する肯定的な記述】

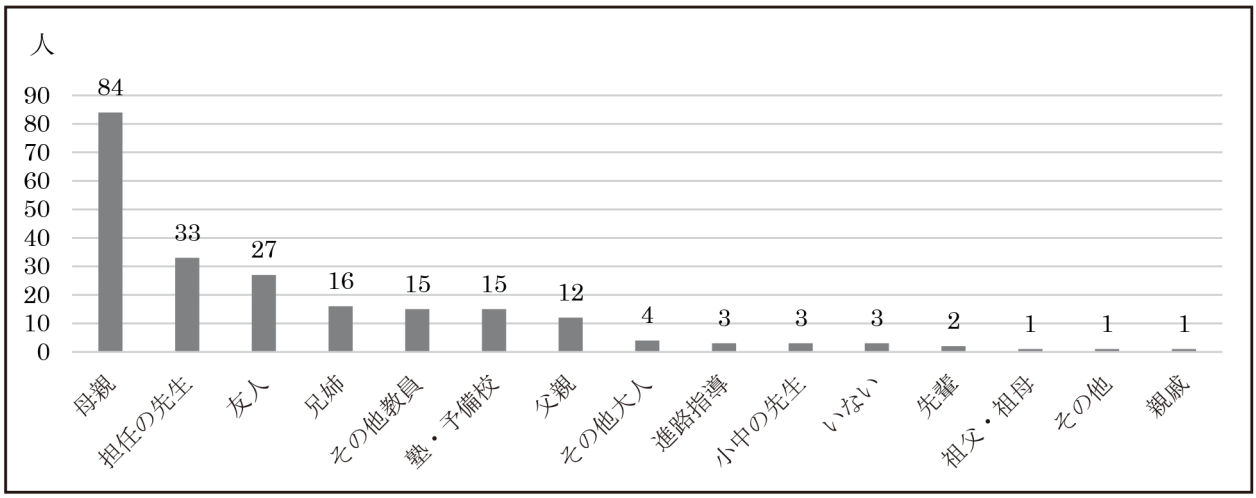
・担任の先生や、私が慕っていた先生がとても親身になって話を聞いてくれたしアドバイスをしてくれたため。
・私のことをよく分かってくれてとても親身になって進路相談を受けてくださった部活動の先生がいたから。
・担任の先生が素晴らしかったからその選択肢は視野に入れようとも思わないから。
・最終的にはキャリアを選ぶのは自分であるし、その他の進路担当の先生も進路相談にはのってくれていたため。
・どの先生もとても親身になって相談に乗ってくれたり、情報提供してくれたのであまり強く思わない。
・私の場合はいろんな先生に話をたくさん聞くことができたし、相談することができたので。
・親身に相談にのってくれた先生がいたので困らなかった。
・担任の先生、顧問の先生に相談するだけで十分だった。
・担任の先生が私を含めてクラスメイト全体をとても理解しようとし、また理解してくれていたと感じるため。
・今の進路選択に満足していることに加え、担任の先生がベテランで、様々な学校の受験の情報を調べつくしていたり、将来どのような仕事につきたいかという事に関しても、クラス全員の進路相談を親身に行っていたから。

このように、高等学校の教員、特にホームルーム担任のキャリア・カウンセリングに対する姿勢は生徒に対して大きな影響力を持っており、「子ども達一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する

悩みや迷いなどを受け止める」姿勢をすべての教員が持つことの重要性と課題があらためて明らかになったと言える。

また、「とても思う」と「少し思う」と回答した学生のうち、有1、有2、有6を理由とする学生は自分の適性や将来設計などを含めた広い視野で相談をしたかった学生と言えるが、卒業直後の進路選択に留まるのではなく、「自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供しながら、子ども達が自らの意思と責任で進路を選択できるようにする」ことの重要性と課題があらためて明らかになったと言える。

なお、グラフ８は進路選択にあたって、よく相談した相手（上位2名）についての調査結果であるが、その調査結果とあわせて、日常的に生徒と接する機会が多く、生徒との信頼関係を結びやすい環境にある教員が行うキャリア・カウンセリングは、生徒の進路選択に大きな役割を果たしていると言える。



グラフ８　進路選択にあたって、よく相談した相手（上位の２名を選択）

研究の小括

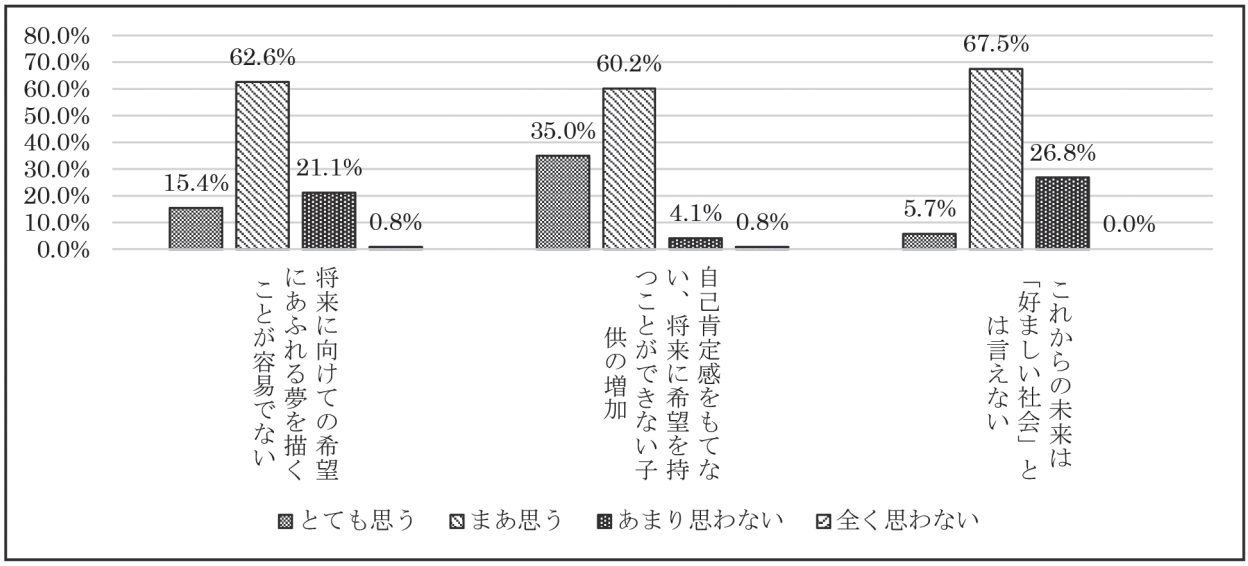
以上、調査結果をもとに高等学校におけるキャリア・カウンセリングの現状と課題、担当する教員の姿勢と課題、そして、教員によるキャリア・カウンセリングの役割と課題ついて明らかにしてきたが、それらをふまえて、学校でのキャリア・カウンセリングに果たす教員の役割と課題は以下のようにまとめられる。

・ホームルームを単位として教育活動を行う高等学校では、ホームルーム担任とのみキャリア・カウンセリングを行った学生が49.6％であることや生徒への影響力も大きいこと、そして進路選択にあたってよく相談した相手として母親に続いて２番目となっていることなどをふまえて、ホームルーム担任は悩みや迷いなどを受け止める姿勢を持ち、生徒理解に務めながらカウンセリングに臨む必要がある。

・出口指導的な相談内容のみと回答した学生が43.9％であることや、多くの学生が広い視野での進路相談を望んでいたことをふまえて、卒業直前の進学や就職に限定せず、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりするカウンセリングの機会や場を持つ必要がある。

その上で、多くの教員がカウンセリングの専門的知識や技能をもたない現状の中で行うキャリア・カウンセリングの在り方としては、ホームルーム担任以外の教員にも分散して相談の機会や窓口を広げていく必要がある。その方策としては、例えばチャンス相談はホームルーム担任以外の教員が関わる割合と広義の進路選択に関わる相談の割合が高かったが、教員が生徒との触れ合いや言葉掛けを通して、すべての教員がいつでもどこでも行えるチャンス相談に積極的に関わっていくことが考えられる。また、同じく自発相談もホームルーム担任や進路担当以外の教員が関わった割合が高く、その姿勢に対する学生の評価も非常に高かった結果をふまえ、生徒が信頼できる教員に気軽に相談できる学校の雰囲気をつくっていくことが考えられる。

なお、文部科学省「高等学校　キャリア教育の手引き」（平成23年11月）では「子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている」ことと、「人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない、といった子どもの増加」（p.9）についてふれているが、それに「リクルート意識調査2019」の設問を一つ加えて加えて将来の社会への展望と自己肯定感に関する思い学生に調査[8]したところ、その結果はグラフ９の通りとなった。



グラフ９　将来の社会への展望と自己肯定感に関する思い

このように、将来の社会への展望については悲観的な回答が多く、特に「自己肯定感を持てない、将来に希望を持つことができない子供の増加」については95.2%の学生が肯定的にとらえている結果となった。その結果もふまえて、生徒の自己実現と自己指導能力を指導・援助していく教員の役割としては、教員自身が「自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団」[9]の一員として、キャリア・カウンセリングに臨んでいく必要がある。

注

１）同報告書、第２章キャリア教育の意義と内容の２キャリア教育の定義による。

２）第一次報告書p.252。なお、校内研修会において実施した（実施予定も含む）研修会の内容のうち、小学校ではキャリア・カウンセリングの実践に関する研修が2.7%（P.62）、中学校ではキャリア・カウンセリング（進路相談）の実践に関する研修が17.9%（p.123）、高等学校ではキャリア・カウンセリング（進路相談）の実践に関する研修（すべての生徒を対象にした進学や就職に関する相談）が17.5%（p.252）となっている。

３）p.25。平成29年告示小学校学習指導要領総則及び平成30年告示高等学校学習指導要領総則においても中学校と同じ内容が示されているが、平成20年告示の小学校と中学校の学習指導要領、そして平成21年告示の高等学校の学習指導要領の総則ではカウンセリングについては触れられていない。またキャリア教育については、平成21年告示の高等学校学習指導要領の総則においてのみ、キャリア教育の推進について示されている。なお、平成29年告示の小学校及び中学校と平成30年告示の高等学校の学習指導要領解説特別活動編では、「特別活動におけるカウンセリングとは専門家に委ねることや面接や面談を特別活動の時間の中で行うことではなく、教師が日頃行う意図的な対話や言葉掛けのことである」ことと、中学校では「特に、高等学校への進学など、現実的に進路選択が迫られる中

学校の段階では、一人一人に対するきめ細かな指導は極めて重要である」（p.131）、高等学校では「特に、就職や上級学校への進学など、現実的に進路の選択決定が迫られる高等学校の段階では、一人一人に対するきめ細かな指導は極めて重要である」（p.121）として、特別活動において教員が行うキャリア・カウンセリングの手法と重要性が示されている。

4）文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査パンフレット　キャリア教育が促す学習意欲」（平成26年3月）による。なお、同パンフレットはキャリア・カウンセリングを「子供たちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別又はグループ別に行う指導援助」と位置づけている。

5）第一次報告書による。ただし、この数字はキャリア教育の年間指導計画があると回答した学校のなかでの割合で、小学校では36.6%、中学校では23.3%、高等学校では19.6%が計画はないと回答しているため、全校数での割合はさらに低くなる。なお、キャリア教育の計画を立てる上でキャリア・カウンセリング（進路相談）を重視した学校は小学校2.2%、中学校49.9%、高等学校48.1%となっている。

6）リクルート意識調査2019」は全国高等学校ＰＴＡ連合会より依頼した9都道府県の各3校ずつ計27校の公立高等学校2年生2クラス分の高校生と保護者を対象に、2019年9月1日～10月25日に実施された。有効回答数は高校生1,997人、保護者1,759人となっている。

7）以下の３つの質問を参考とした。なお、（　）内は「リクルート意識調査2019」の高校２年生の調査結果である。

・もっと生徒のことを理解してほしい。（28.7%）　・もっと生徒の意思を尊重してほしい。（23.7%）
・もっと親身になって相談にのってほしい。（18.2%）

8）「リクルート意識調査2019」では「これからの未来は好ましい社会だと思いますか」という設問であったが「これからの社会は好ましい社会だとは言えない」に変えて実施した。「リクルート意識調査2019」の結果はとても好ましい社会だ（6.3%）、まあまあ好ましい社会だ（45.1%）、あまり好ましい社会ではない（38.8%）、非常に好ましくない社会だ（5.7%）となっている。

9）平成29年告示中学校学習指導要領解説総則編p.98

参考文献

・「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成16年1月）
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm（最終閲覧2020.9.10）
・国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」（平成25年３月）
www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/pdf/ver_all.pdf（最終閲覧2020.9.10）
・一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ「合同調査第9回高校生と保護者の進路に関する意識調査2019年報告書」（2020年2月）
www.zenkoupren.org/pdf/siryobox/chosakenkyu/shinroishiki_haifu20200210.pdf（最終閲覧2020.9.8）
・文部科学省『平成29年告示中学校学習指導要領解説総則編』東山書房、2107
www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/icsFiles/afieldfile/2019/03/181387018_001.pdf
（最終閲覧日：2020.9.10）
・文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版、2012